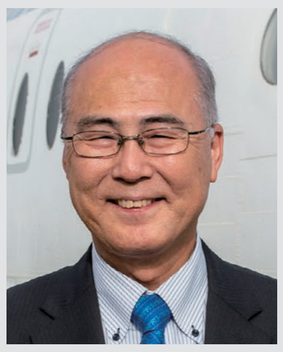
写真でみる
日本政府拠出モーリタニアEIIPプロジェクト
Visite Ambassadeur du Japon

「100万人の詩人の国」と呼ばれ、ある詩人には「控えめな真珠」とも形容されたモーリタニアは、マグレブと西部アフリカを繋ぐ場所に位置し、アラブとアフリカの交差点となっており、また、太平洋にも開け、古くからサハラ砂漠のキャラバン貿易や海洋航路の拠点の一つとして独自の豊かな歴史や文化を発展させ、アラビア語やフランス語等様々な言語も混ざり合う複雑かつ魅力的な国です。85%以上が砂漠に覆われ、干ばつや洪水、バッタ被害等、様々な環境問題の影響を被っています。モーリタニアが位置するサヘル地域におけるテロ対策は喫緊の課題です。（江原功雄モーリタニア駐在日本国特命全権大使の挨拶文より抜粋。外務省 https://www.mr.emb-japan.go.jp/itpr_ja/embassy.html）


©ILO/Alfredo Cáliz

©ILO/Alfredo Cáliz

場所：ムベラ難民キャンプ Camp of Mbera
ムベラ難民キャンプでレンガを製造する難民女性。女性たちはILOによる訓練を受けている。
Refugee women working on Adobe brick manufacturing in Mbera camp, trained by the ILO

©ILO/Alfredo Cáliz

場所：ムベラ難民キャンプ Camp of Mbera
学校建設現場における訓練生対象の実践的訓練
Practical training with students of the project in the construction site of the school

モーリタニアへの難民の流入は、マリでの暴力の激化により2018年に急速に増加し、マリ人の新規難民は5,800人を越えました。2019年1月31日時点で、バシクヌー南東の乾燥地帯にあるムベラ難民キャンプにおけるマリ難民の数は54,957人です。

限定的な雇用機会や、就業のための技能の欠如により収入源が限られているため、難民たちは日々の生活を凌ぐに十分な糧を得るのも困難な状況です。一方、モーリタニアの受け入れコミュニティも高い失業率と不完全雇用の問題に直面しています。このような中、急激な難民流入、社会経済的な混乱、難民と受け入れコミュニティ間の不平等感に対処するために、仕事の創出が不可欠です。

日本外務省は、ディーセント・ワークと雇用集約型建設事業による地域経済開発を推進し、難民と受け入れコミュニティの人間の安全保障を向上するためILOプロジェクトに拠出しました。プロジェクトによって、ムベラ難民キャンプと受け入れコミュニティの若者は、技能のあるなしに関わらず、現場での建設技術訓練を受講し修了証を取得することで、エンプロイアビリティ（就業能力）が強化されます。活動では、メイド・イン・ジャパンのエコ建設技法を取り入れることで、地域における持続可能な社会経済開発に努めることになります。さらに、中央・地方政府機関に技術支援を提供することで、地域の企業と働く人々は、労働安全衛生や適切な労働環境に関わる慣行も改善する見込みです。

©ILO/Alfredo Cáliz

場所：ムベラ難民キャンプ Camp of Mbera
ムベラ多目的訓練センター建設現場
Construction site of Mbera Multipurpose Training Center

©ILO/Alfredo Cáliz

場所：ムベラ難民キャンプ Camp of Mbera
ILOプロジェクトの訓練生との記念撮影
Group photo with ILO project trainees

※写真は2019年7月、江原大使がムベラ難民キャンプにおけるILOプロジェクトの視察に訪れた際、撮影したものです。